

『民俗台灣』創刊の背景

著者	池田 鳳姿
雑誌名	沖縄文化研究
巻	16
ページ	13-34
発行年	1990-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10114/00015684

『民俗台灣』創刊の背景

池田鳳姿

私が中村哲先生に初めてお目にかかったのは、日本の統治下にあった戦前の台北で、太平洋戦争のさなかであった。

先生は当時、台北帝大の助教授で、同大学医学部教授の金関丈夫先生、画家の立石鉄臣氏、写真家の松山慶三氏と共に私のいえにお見えになつた。案内役を務めたのは、いえの周辺で民俗採集を行つていた池田敏雄であつた。

当時の台湾の知識人であれば、この顔ぶれに台北で刊行された月間雑誌『民俗台灣』を連想するごとであろう。それは金関先生をはじめとしてこの雑誌の中心メンバーの人々であつた。

『民俗台灣』は皇民化運動で在来の習俗を禁止し、消滅を計つていた当局の方針とは反対に在来の慣習を記録し、研究する雑誌であつた。

日本の五十年間の統治の中で、本格的に台湾の習俗を取上げて調査、研究した専門誌は、明治期に

当局の意向を受けて刊行された「台灣慣習記事」があつたが、それ以来の専門誌であつた。

太平洋戦争下の厳しい時流に抵抗して、『民俗台湾』に参加した人々は同志という感情に似た、仲間意識を共感していた。中村先生は金関先生とともに『民俗台湾』を代表して「柳田国男を囲む」座談会に参加され、あるいは「本朝媽祖渡来考」や、巻頭言「南支調査と台湾民俗研究」などいろいろと雑誌に書かれ、活躍させていた。

当時先生はまだお若かつたので、皆は親しみを込めて「テツさん」とか「ナカテツさん」とお呼びしていた。

中村先生の御結婚祝いに、家からあひるのひよこをお届けしたが、先生はこの風変わりなお祝いを喜んで下さった。戦後池田の郷里の島根県松江に住んでいた頃、先生は子供の頃の私のことを思出して下さったのか、東京から子鹿のバンビのぬいぐるみを送つてください、少し驚いた事があった。

中村先生は松江に一度おいでになり、舟木や福間など有名な陶工の窯が並んでいる玉造りを訪れて陶器などを求めにならっていたが、その際、私たちのきたないアパートの部屋に泊まつて下さった。上京した折、戦後の復興のまだ進んでいない浅草を先生に案内していただき、隅田川の花火を見たり、初めてパフェというものを食べたり、先生のおたくにみえた一三人の客とともに夜おそくまでお喋りをしたり、楽しい時間を過ごした。

東京の岡田謙氏や江上波夫先生から池田に平凡社入社のおすすめがあつた時、中村先生は知人が中

にいるとおっしゃつてわざわざ池田のために動いて下さつた。

池田の死後も追悼集会などでいろいろとお世話になつた。中村先生の思い出をたどると御迷惑ばかりおかけしていただけようと思える。

それでも先生はいつもおつとりとしてあたたかい。

遠い戦前のことでありながら『民俗台湾』を通じての御縁の強さを、今更のように認識するのである。

一 皇民化運動

「『民俗台湾』はある意味では台湾民衆から発生したと言つてもいい。」と池田敏雄はかつて記したことがあつた。彼は長年にわたる台北万華での民俗採集や、台湾人との交流を通じてその習俗を記録する民俗雑誌をやりたいという意欲を燃やしてきた。

出版企画で関わっていた東都書籍からすでに台湾の習俗、民話を綴った「七娘媽生」「七爺八爺」の私の本が、彼の指導下で刊行され、反響を呼んでいた。民俗雑誌もその一直線上に続いている企画であつた。

かつて海上のシルクロードの玄関口であった福建省の泉州、漳州にちなむ豊富な民俗資料をかかえながら、皇民化運動にもまれている民衆の現状が、池田の雑誌への情熱のばねになつていた。

総督府が植民地統治に推進する皇民化運動とは改姓名や日本語常用、生活様式から信仰にわたつて日本化を強要し、在来の民間信仰、年中行事等の習俗文化を否定し、破壊させるというものであった。神社の建立と寺廟の整理廃止、雛祭り、五月の節句、七夕祭りとこれが内地の年中行事だという行事が学校で盛んに行われた。

家庭では大麻と称される白木の神棚が、観音、媽祖、土地公等の神像を祭る卓上に割り込んできた。「お巡りさんが見回りにやってくる、それっ。」と平素しまつてある場所から急いで引出して、卓上の中央に据付け、巡査が去つて行けばまた、元の場所に捨置くといういたちごっこであった。台湾人街で神棚を無造作に汚れた籠の中に詰込み、はだしの男が天秤棒でかついで売り歩いている風景が『民俗台灣』の「亂彈」の中に記してあつた。

◎三高女の皇民化

「この非常時に卒業生の本島人女生徒全部に紋付きの盛装をさせ、壇上から会心の笑みをもらした女学校長があるという。日本人精神とは果たしてこういうものであろうか。」と「乱弾」に取上げられた女学校は、母や伯母や親類縁者、私自身も勉学した三高女のことを指差していた。本島人女生徒を収容する台北で唯一の公立女学校で、それだけに皇民化運動の先端をいつていた。一番早く創立されながら、内地人を対象にした女学校が設立されるや、「第二」という名称になり、さらにもう一つ

内地人女学校が加わると「第三」という名称に変更させられ、一人、便利な市街地から郊外に追われた。

男子の中学校、師範学校も同様の経過をたどり、初等教育も内地人の小学校と本島人の公学校に分れ、区別されていた。

皇民化、一視同仁と鳴らしている一方で、三十万人の内地人と六百万人の台湾人との間に距離を敷き、上下関係を作り、両者の交流を防ぐことに腐心していた。三高女には一握りの内地人も入学したが、隔離され、国語常用、台湾語禁止とうたつているのに、女学校で同じ年頃の内地人少女と日本語会話をする機会は巡つてこなかつた。

私が三高女に入学したのは昭和十六年で、『民俗台湾』の創刊の年にあたつていた。朝礼は御製、皇太后御歌の朗読から始まり、生花、茶、琴、作法、日本舞踊の「光榮記念館」での課外授業が目白押しであつた。

和裁の時間が多く、一つ身、三つ身、四つ身、ゆかたに至るまで、四年間たっぷり授業を受けたが、生活実感がない作業なので、失敗も多かつた。しかし直線断ちや、裁縫道具が珍しく、また店に入つて着物の生地を物色する時が楽しかつた。調理の授業に中国料理はなかつた。第一回の調理の時間はたけのこ御飯でたけのこの使い方がユニークで、素朴な味わいがした。

三高女の教師は内地人ばかりであつたが、当局の教育方針に添つたのか、まるで目前の本島人生徒

にも固有の文化が存在することが、目にとまらないかのようにふるまつた。今では皆懐かしい人々で
あるが、二、三の際立つて粗暴な先生だけは例外であった。彼らは積極的に本島人の寺廟や生活習慣
の全てをあげつらい、侮辱用語を連発した。

今日の日本ではサンダルが日常的に使用されているが、私は相当長い期間、サンダルを見る度に妙
な感じがした。当時サンダルに似た台湾下駄の使用禁止を学校で言渡されていたが、これら先生の一
人は、足をそのまま突っ込んで履く真似をしながら、「行儀が悪い」「品がない」と何度も吐き捨てる
ように言つたものである。現在の人々が食べているラーメンは台湾や南中国のいくつかの地方特有の
物で加里と曹達灰を混ぜ塩水でこねて黄色い色を出すのだが、「変な色付けをしたうどん」とラーメ
ンを指差す教師もあつた。

「自分の生徒に少しの関心も愛情もなく、軽蔑ばかりしている教師に教育が出来るのだろうか。」
と当時私が語った感想が古い池田のメモ帳に残されていた。

殆どの三高女の生徒は内地人と身近に接する機会が少なかつたので、これら居丈高な教師の言動を
統治者と一体で、総督府の意向を代弁したのだと思込み、個人の品性に発しているとはみなかつた。
それらの教師が「土人の家の作りは」「チャンコロの帽子は」ときつい表現で投げかけてくる言葉を
生徒は顔色を変えることなく、耳を傾けた。

入学した当時、改姓名をした人はクラスに一人か二人見かける程度であつたのが、卒業の年は大部

分を占めるようになつた。

現在、三高女の友人で台湾に残っている人は少なく、米国その他の国々に散っている。終戦後、日本の植民地支配から解放されたが、あのおとなしかつた友人にとつて更に難しい社会が訪れたのであろう。

◎皇民化と人々の暮らし

植民地としての統治を受け、皇民化の衝撃の中で中華意識の強い台湾大衆は、かえつて固有の伝統の殻の中にしがみついた。媽祖、觀音、玉帝、土地公等の神仏、祖先の祭りに伴う年中行事や、「孝」を中心とした儒教的規範やしきたりが迷信、不合理、差別を多く含んだまま日常の暮らしを律した。

押寄せてくる異質の日本文化に対抗するために、閉ざされ、停滞した世界の中で、ただこれまで伝えられてきたものを反復し、自足し、自ら改革変化を遂げようとはしなかつた。紀元二千六百年の式典が盛大に行われた前後から皇民化の締付けも勢いを増した。国語講習所や時局用講習会へのかりだしが厳しくなり、保甲制度の隣組の強化や婦人会等の組織作りで相互監視を奨励した。

戦局の拡大と共に、物資の出回りも少しづつ窮屈になり、内地人に対して行われている配給制度にありつけるようにと「国語家庭」の認定を受ける人も増加してきた。改姓名、畳の部屋、ゆかたに下駄という内地式の暮らしをするのが「国語家庭」であった。こうして台湾人の暮らしに変化が起きてき

たが、これは伝来の文化習俗が変質したのではなく、内地式か本島式かという二者選択の中で選びとつた暮らしの変化であった。

食べ物などは例外であった。おでんや巻寿司の屋台が在来の食べ物屋と並び、子供はみつ豆やきびだんごを食べ、家庭にも味噌汁やだしこんぶや、たくあんや御飯釜の台所用具が入り込んでいた。

植民地支配から何十年も経た今日の台湾では、皇民化の重しが取れ、反対に在来の伝統や習俗や民具に至るまで一変してしまった。しかし和食は新たに流れてきた大陸各地の味に混ざって一層盛んなものになつていて、日本時代には殆ど見られなかつた現象でありながら、現在の台湾の家庭に広く定着してしまつたものに、家の中で靴を脱ぐ日本式の習慣がある。

二 『民俗台灣』の創刊

1、万華での民俗採集

「台灣桃燈考」「花簪」「華麗島民話集」「万華雜記」「雷神爺」「廚房雜記」「冬生娘仔」等、池田敏雄はこの時代、台湾の文化習俗を正面から取上げて書き、本や新聞雑誌に発表していた。

民俗に取り組んでいた当時、「国語新聞」の編集陣の一人として台湾日々新報の嘱託を務め、西川満が主宰する「文芸台灣」の編集部にも参加していた。この雑誌は好んで台北の風物を素材にして、情感を込め美しくうたいあげていたが、それは詩や作品の雰囲気を盛上げ、エキゾチックな舞台装置

としての効果で取上げている場合が多く、池田は風俗を正面から取り組んでいない「文芸台湾」には満足していなかった。

民俗採集を行つた台北市万華は淡水河の流域に在り、貿易港として台北で一番早く開けた町で百余年前まで台南、鹿港、万華と台北の三都會の一つに数えられていた。しかし淡水河が徐々に浅くなり、大きな商船の出入りが困難になるに従い、貿易港としての機能を失い、さらに日本に植民地下に入つて日本人の手で風俗営業を営む一帯ができたために町は寂れる一方になつていた。

台湾の住民は福建省の泉州と漳州、広東省北部の客家の移住者と、土着の高砂族で構成されていたが、万華の住民は主として泉州からの渡来者であつた。海のシルクロードの玄関口と知られる泉州は中国でも殊に民間道教が発達した区域で、保守的な万華の人々は玉皇大帝を中心とした天界の神々や、仙人、仙女等、「孫悟空」の中で展開されるような天上の世界を信仰していた。他には西方浄土の観音、海の守り神の媽祖、三国史の関羽にあたる関帝が信仰の中心になつていた。

乱熟した漢民族文化の流れの中で、百年、千年のリズムを踏んで生活しているような民家の伝統的な暮らし、多様な民間伝承、手仕事でしつかり細工され、生活の場で練られた人間のぬくもりが伝わるような民具、民俗を手がけようというものが注目し、食指を動かすのも当然のことであろう。

竹細工や藤細工、蠟燭作りや綿打ちの古い工房が並ぶ万華の職人街、けんそうと庶民的な工ネルギーに満ちた市場、人形芝居や胡弓を手に故事を歌う芸人や、物売りの呼声がいきかう通りの活気、

路地裏にまで溢れる生活の匂いに池田は引き込まれていった。日常家で何気なく使用している道具、煙管、燈台、土林刀、はし立て、竹椅子、水瓶等の一つ一つに興味を抱き、愛着を示した。ちまきの三角とおにぎりの三角が共通していて、尖った角が邪を払う意味があつたり、心臓を現していたり、ひきうすは内地の村に似た物があつて、柳田国男が取り上げて書いた話や内台の民話の共通点など、彼の解説が新鮮で私達はあらためて身の回りを見回して見た。

池田は台湾語を使用した独特のユーモアのある話ぶりと真しな態度で庶民の中にとけ込み、民俗採集の輪を広げていった。彼と知り合った老人達は皆、やりとりが楽しいともらしていた。民族固有の文化遺産に上下関係や甲乙をつけることは出来ないと彼が何げなく語るあたり前の言葉にも、皇民化で痛めつけられた人々は我が意を得たりとばかり喜んだ。

一方で池田は内地の文化の紹介者であった。

「沖縄では台湾のように油でいためた料理が多く、豚の皮をつけたままの角煮もあり、豚肉をよく使う。墳墓の作りも台湾に近く、日本の中でもっとも中国の影響が顕著に現れている所だ。」と彼は言った。私達が台湾に近い沖縄の存在をしつかり意識するようになつたのはこの時以来である。

よく生れ育った島根県出雲地方の古事記の神話とのつながりや、方言や風物、祖父母や、小学生の運動会、幼なじみの話まで懐かしさをにじませながら私達に紹介した。これが内地人のお節句だ、七夕だ、お正月だと学校が示し、指導している一つのパターンだけの日本の文化習俗は本来存在せず、

それぞれの地方に独特のローカル文化があつて寄集まつて日本の文化を形作つてゐるのだと、出雲地方を例にとりながら説明した。

私が内地に対し抱いたよき美しきイメージや知識が、就学前の絵本を始め、全て自分が選択し、読んだ書物から得たもので、学校で学んだものではなかつたことを知り、たとえば万葉集で皇国史観のみ強調されているが、本来はおおらかで人間味のある秀れたものであるのに、親しみが持てる紹介がなされず、高飛車な押し付けが日本のよき部分や古典まで、私達から遠ざけてしまつているのだと彼は残念がつた。

2、『民俗台湾』の企画

池田の指導で台湾の生活習俗を綴つた第一作「七娘媽生」を昭和十三年に、昭和十五年秋には第二作「七爺八爺」の初版が東都書籍から出版になつた。時局が切迫していたのにかかわらず、「七爺八爺」は刊行後順調な経過をたどり、池田が雑誌をやりたいという気持ちを、民俗採集の相手に漏らすようになつたのもこの頃からであつたと思う。

皇民化で変化を余儀なくされてゐる在来の習俗を一人の人間だけで細々と採集するのではなく、大勢の人が参加し、方々の習俗を記録、収集することができるよう、そのための雑誌を刊行したいという意向であった。台湾人が自らの伝統文化を語れるような場を持たないというのは不自然な事で

あつた。

現在の習俗をその実態のままとらえ、記録し、資料を集めることは、柳田国男の成し遂げた日本民俗大系が村での綿密な調査から出発しているように、台湾人の文化資産の全体像を明らかにすることにもつながると彼は考えていた。

台湾の慣習を記したものに「台湾慣習記事」があり、明治時代当局の意向を受けて、主として統治の材料にするため刊行した本で、現在でも参考になる価値ある文献であるけれども、それは統治者側にたって、上から台湾の慣習を見おろした冷たいものである。彼が計画する『民俗雑誌』は、万華の人々への愛情から出発しており、台湾人の慣習を扱うのに冷たく上から下を見おろすようにして調査を進めるのか、愛情をもつて民俗採集するのかではなく質が違うものになると強調した。

漢民族固有の文化を理解出来るメンバーを集めて、共同で雑誌をやりたいということであった。周囲の者も私も平素から内地人で師にあたる池田と会話するときはややあらためり、緊張気味に耳を傾けていたが、今の時局を認識しつつ、あえて民俗雑誌に挑みたいというその言には殊に重い響きがあつた。

この企てに感銘を受けた周囲の人間や私にとって『民俗台湾』はこの時点から始まった。雑誌はその紙面の内容で評価されるものであるが、『民俗台湾』に関しては当時の池田の気持ち、言動を語らなければ、雑誌の本質は、完全に見えてこないと思えてならないのである。

台北の東都書籍は三省堂系で池田の縁者、持田辰朗が取り仕切っていたが、当初は出版より書籍の取次ぎ、卸が主な事業であった。池田は子供の頃からここに出入りしていたが、一般には手に入りにくいような書物でも人より早く接し、読む機会があった。

民俗を手掛ける以前にマスコミに発表した文章では「書話」「裝丁閑話」「台灣に於ける文筆書目」というように本に関するものが多い。この頃池田は中山大学の「民俗月刊」や上海で出版された『林蘭』編の説話にも刺激されていた。

「長い間『林蘭』という女性一人の仕事かと思われていたが、実は多数の男性の共同執筆だったことが判明した。」と池田はそのことが楽しくてならないという風に当時私によく語った。彼は『民俗台灣』に李氏杏花をはじめ、十人前後の女性名を使用して民俗に関する文章を書いたが、最近雑誌の頁をめくっている中に、池田が何人の女性の文章のようにみせかけて、実は一人の男性の文章であるという、『林蘭』の逆の形を実行していたことがにわかにわかつてきて、彼の遊び心が乐しかった。

3、金関丈夫先生

雑誌のメンバーと賛同を集めるための訪問は台湾大学医学部教授金関先生から始まった。昭和十六年の初春であった。

この前年の秋に出版された私の第二作『七爺八爺』の後記で、池田は金関先生の名前を筆頭に並べ

て謝辞を述べている箇所があった。「台湾日々新報」か「文芸台湾」等のマスコミの会合の席で、金関先生にお目にかかる機会を得て、台湾習俗を綴った私の本について、励ましの言葉をいただいたのではないかと推測している。

「私が金関先生に初めて雑誌の計画を持ち出したのは昭和十六年の春頃ではないかと思う。金関先生は本来自分が出るのは筋違いかも知れないが、移川子之蔵の『南方土俗』は高砂族を中心なので、漢民族の民俗を対象にした雑誌も必要だと思う。他に適当な人がなければ引受けてもいいと言われた。」と池田は先生を教室に訪ねた時の様子を書いている。

「先生の御意向は民俗だけではなく、『ドルメン』式の肩の凝らない雑誌にして、考古、歴史、地理、自然詩なども盛込みたい、又、紙面を解放して読者の投稿なども取りあげたいということであった。」

『民俗台灣』の体裁がA5判で、背中を綴じているのには『ドルメン』に習つたもので、また中の組も一段組ではなく八ポイントを中心にしているのも『ドルメン』式である。編集方針も体裁も『ドルメン』という手本があるので簡単にきまつた。」

雑誌の発起人は金関先生、岡田謙、須藤利一、陳紹馨、黃得時、万造寺龍の諸氏が名前を連ねた。岡田、須藤の両氏は間もなく東京に去り、万造寺龍は名前だけの発起人であった。

金関先生は解剖学教授であつたが、人類学、考古学、民族学、民芸にいたるまで、古今東西に通じ

た学識と広い視野を備え、後には数々の業績をあげられ、朝日賞を受賞された学者であった。

池田は泉のようにわき出て尽きない先生の学識に接して、「現代のゲーテ」だと私にその感動を伝えた。貴重な提言や意見ばかりでなく、権威とは無縁な一庶民の時局に抵抗した出版計画に親身に対応され、乗り出してくださいった先生の人柄を池田は長く敬愛した。

民族の文化を取り上げられようとしている民衆に対し、身の程も顧みず、善意と優しさを傾けて民俗雑誌を計画した池田の心情は、そのまま先生にも相通じるものがあつたのであろう。それは立石氏、松山氏、中村先生を始め、雑誌に参加された多くの人の共通の心情であり、そこから同志のような友情ときずなが生れたのだと思う。

創刊に先立つ昭和十六年五月、発起人を代表して金闇先生が発刊趣意書を執筆し、各方面に配布した。

「単に煙滅を防ぐと言うだけの意味に於いてすら一見何ら実用的な価値のない自然に対しても、政府は天然記念物指定等の方策を立て、これが保護と研究を奨励している。我々は台湾旧慣の煙滅を惜しむものではない。しかしこれを記録し、研究することが、我々にとつての義務であり、且つ單に現下の情勢のみを考えても、甚だ急務であると言うことを強調したい。」と述べられ、

「東都書籍が『民俗台灣』なる定期刊行物を出版されることは、かかる意味に於いて最も時宜を得た挙であると吾人は信する。微力ながら出来るだけの援助を惜しまないつもりであると同時に本島内

外の有志者に御協力を希望してやまない次第である。」と呼びかけていられる。

「煙滅を惜しむものではない」という用語をめぐつて詩人の楊雲萍氏が「台湾日々新報」で批判したことから趣意書論争が始まった。

「自分などいささか心に平らかなざるは、彼等研究にそめ始めるものに、冷たい高飛車な、あるいは機械的な態度、方法を持つする者のあることである。（中略）台湾旧慣を研究しようとして居るに、もう其の『煙滅を惜しむものではない』と言つて居るのである。」と楊雲萍氏は書いた。

その頃発表される文章は検閲を考慮して多くの時局用語を散りばめるのが常で、『煙滅を惜しむものではない』は皇民化運動に配慮して書かれたものであろう。先生は「民俗への愛」で楊雲萍氏の批判に答えられた。

「台湾民衆を愛し、その民俗を理解せんとする熱意に至つては、我々は決して人後に落ちないつもりである。ただその愛と熱意を趣意書の文面に吐露するを適當とするか否かの判定は自ら別問題であろう。」（中略）

「台湾民俗に対する愛なくして誰がこの事業を発願し得ようか。この愛以外の何物が、この困難事に我々を追いやることができるだろうか。」（中略）

「我々の協力せんとする雑誌はまだ一号も世に送り出されていないのである。千百の宣言よりは一部の実冊子が君を納得せしめ得ることを我々は信じている。」

と楊雲萍氏に答えるために当局が禁止しようとしている台湾民俗への愛という御本心をはつきり述べられてしまつたのである。先生の立派なお人柄が文章の中によく示されている趣意書論争であつた。

4、雑誌の刊行

創刊号は昭和十六年七月号からであつた。

「心は心に伝えられる記憶、これが真のモニュメントであり、一の伝承団体、すなわち民族はそれ自体一の広大な記念物であろう。

我々は記念物を愛護しよう。しかし、その存続がもし天意でないならば——そのいかんは時の解決にまかせて——せめてその完全な記録を残すことに努めよう。」

と格調の高い金関先生の巻頭語や松山慶三氏の写真とセットになつた民芸解説などが掲載されていた。

私の知つていた人では、『七爺八爺』の挿絵を書かれた民俗図絵の立石鉄臣、池田の縁者庄司久高、伯父の黄啓木が参加していた。

正面から批判できない皇民化を風刺するために「乱弾」という投書欄もあつた。「乱弾」は村芝居の楽屋ではやすかしましい伴奏のこととて、この欄はのちに「点心」と改められた。池田が雑誌の企画時からあたためてきたもので、私たちとも一番話題の多かつた欄であつた。

「文献紹介」には中村哲先生の日本習俗の中の非合理的なものまで、皇民化として本島人に強制することは不可であると強調した台湾時報に載った論文が紹介されていた。

編集人は池田であるが、東京在住の東都書籍兼三省堂の役員、末次保の名前を使用した。

第一号から池田の『有應公の靈験』が検閲で二頁削除処分にあったものの順調な第一歩をすばりだした。

八月一日、台北市郊外で、読者による自由参加の座談会を催したが、参加者は日台同数で、職業も多方面にわたっていて、台北のおよその読者傾向がうかがえた。矢野峰人、宮本延人なども読者として顔を出していた。

明けて昭和十七年一月、台南で、続いて台中や地方の各都市で、読者座談会がもよおされた。また、「民俗採訪の会」など雑誌主催の定期的な催しものが行われるようになつた。そのつど、三島格氏など多数の人の世話になつた。『民俗台灣』は着実に広がり、全島的に知られるようになつていつた。

当時の「満州國」や中国各地、ニューデリーやシドニーからも申込みや反響があつた。

庶民の暮らしの情緒を描いた立石鉄臣氏の精密な民俗図絵、松山氏の拡張高いグラビアは雑誌の華であり、毎号人気を呼んだ。立石氏は希望して東都書籍の職員になり、雑誌のために多くの時間を確保でき、民俗図絵もてのこんだものになつた。軽妙で機知に溢れた文章とともに、雑誌に独特の楽し

い雰囲気をかもし出した。編集会議はたいてい月に一度、金関先生、立石氏と、池田の三人で行われていた。

昭和十七年の池田のメモ帳によると雑誌の寄贈先は中国の協栄印書館や、改造、文芸春秋、中央公論、婦人朝日など東京の月間誌、週刊誌を中心としたマスコミ関係と文書課長、保安課長、警務局長、文政局長の検閲官僚に寄贈されていた。

雑誌防衛のために池田は総督等の訓示を読みあさり、適時に編集後記に挿入した。毎回総督府警務局保安課で検閲を受け、許可が下りてから、雑誌を配布することが出来た。削除処分で創刊号の『有應公の靈験』が二頁空白になつた他、不許可で第四号の記事四本の八頁分、十四号の『性と諺』が減頁になつてゐる。その他字句の修正や二三行という短い削除が多かつた。池田は少し遅れて出版された合作本にその部分をそつと復活したり、民俗資料として加えている。

定期的な検閲以外に、池田が当局から呼び出しを受けたことがあつたが、金関先生が直ちに同行してくださつた。先生の決意のほどがうかがえる。

私の家にも特高刑事がやつてきた。第三作『台湾の少女』が佐藤春夫の序文と、文部省推薦で東京で出版された後のことで、雑誌刊行後三年ぐらいあとのことだと思う。寒い日で、台湾では珍しいグレープフルーツを母が客に供した。特高刑事は主として池田がどんな指導で、私に台湾の習俗を書かせているのか、『民俗台灣』をどんなふうに説明しているのか、専ら池田に焦点を当て、私に尋ねた。

彼は『民俗台湾』を始める少し以前から台湾日々新報の上司大沢貞吉のすすめで新聞社を辞し、総督府情報部勤務になつていた。その情報部の雑誌の取材を兼ねてよく台湾の各地を旅行し、『民俗台湾』関係の知識人や読者と交流を重ねた。

池田の周囲には、それら台湾の知識人の他に、名もない庶民の輪があつた。万華の中でも、文筆活動の経験のない人達—呂阿昌等の私の家の主治医や弁護士、近所の記者、女学校の友人除青絹等が池田の手で雑誌の文をよせるようになつた。池田は万華の青山王公廟に寄居していたが、周囲の人々は彼に親近感を寄せた。長期にわたる雑誌活動で、その名は『民俗台湾』と一体化されて台湾社会に浸透していた。雑誌の一方の主人公は池田に声援を送った台湾民衆であつた。

金闕先生の広範な学識に魅了されて、先生の周囲にも多数の知識人が取り囲んでいた。中井淳氏等の台大教授や竹村孟氏、楊雲萍氏、上北するたびに顔を出す台南の国分直一氏、顏水龍氏等教室に入りする人で、一種の文化サロン的雰囲気をかもし出していた。この人々の寄稿で、『民俗台湾』は質の高い、豊かな内容を維持していた。

中村哲先生は雑誌発刊後、しばらくたつてからの参加であつたが、雑誌のために積極的に助言をされ編集にも加わった。池田によると中村先生は柳田国男の令息と幼なじみであることから、民俗に親近感を抱き、また法制史的な興味から台湾の習俗にも目を向けられていたそうである。

『民俗台湾』は昭和十六年七月号から、二十年一月号まで通巻四十三号続いたが、池田は昭和十九

年六月に招集令状を受けたので、池田の編集は三十七号までで終わり、三十八号は金関と立石、三十九号から四十二号までは金関先生が編集をされた。

三十七号までの文献紹介、消息欄、執筆紹介等の無記名の記事記録、黃鶴や、牽牛子、孟甲生、祝英台近、芝居の主人公等の筆名を用いて、池田は小欄を書き埋めた。自らの専門である民俗に関する文ではいくつもの女性名を使用して、別人を装つて発表している。

金関先生は金鶴、蓬頭児などで、金鶴、黃鶴ともに台湾酒の銘柄名である。

『民俗台灣』は戦時下の制約や、検閲等の事情を考慮し、雑誌の権威を高めるために、紙面に粉飾を施し、多くの編集員があるかのごとく装いをつけていた。池田は民俗に関する文以外はいろいろな場面で自分の名を伏している。編集者としての心がけだと説明していたものの、台湾の人々は長い間そのことを不思議がった。それは民俗雑誌を計画し、その出現のために多くの人々の力添えを戴いた人間の慎みであろう。純粹に『民俗台灣』の成功だけを願い、力を傾けて編集しながら雑誌から何かをもとめようとはしなかった。

雑誌を代表された金関先生も同様であろう。言論統制下の危険を承知の上で研究者の貴重な時間を裂き、雑誌の為に尽くされた。

『民俗台灣』の編集は夜、家に帰つてからの仕事になつたが、ゲラ刷りがではじめると帰りに金関先生の研究室に立寄つた。どんなに遅くなつても先生の研究室だけは灯りがついていることが多

かつた。

ゲラに軽く目を通すというだけではなく、たいていそれから遅くまで二人でゲラの読み合わせをした。戦時中なので、先生が自分で夕食を工夫して下さった。コーヒーのあきかんでたきあげた飯にバターを付け、それをのりにくるんで食べたりしたが、その香りが忘れられない。」と池田は敬愛する先生の思い出を記している。彼は偉大な先生から計り知れないものを得た。

民俗図絵の立石氏、グラビアの松山氏の編集スタッフや日台の寄稿家、中村哲先生始め折々に支持協力された多くの編集同人、暗黙のうちに雑誌を応援した台湾民衆、紙面はどの一つの要素を外しても成立たない。

先年、東京で「民俗台灣」の復刻版のようなものが出版されたが、残念なことに検閲で削除された「有應公の靈驗」以下の幾つかの文章、出版出来なかつたゲラ刷り、創刊前後の会合のメモなど、雑誌の編集者がかかえていた資料、記録が一切掲載出来なかつた。

『民俗台灣』は戦後早くから台湾でも復刻され、今日に至るまで、台湾の文化やマスコミに様々な影響を及ぼしている。あの困難な時代に雑誌に参加されたすべてのメンバーに感謝したい。